

知里真志保を語る会『室蘭・登別沿岸のアイヌ語地名研究 インカァアンロ (眺めましょう！)』推薦の辞

知里真志保を語る会『室蘭・登別沿岸のアイヌ語地名研究 インカァアンロ (眺めましょう！)』2006年, i.

八年ほどまえ、札幌郊外の病院に入院していたことがある。定山溪の山あいを東向きに流れてきた豊平川が真駒内の柏丘にぶつかり、北へと進路を変えるところに病院はあって、空沼岳を源とする真駒内川との合流点からも近かった。そこは、新生代第四紀に形成された札幌面と呼ばれる広大な扇状地の要の位置にあたる。扇状地はここに始まり、10kmほど北に広がり、およそJRの線路に縁取られるようにして、またそのあたりにいくつかの湧き水を生んで尽きている。札幌の街はこの扇状地の上に築かれている。私はたまたまそういった知識を持ち合わせていたため、長く、散歩もかなわなかった療養生活中しきりにその知識をもてあそび、それによって慰められることが多かった。そして何の役にも立ちそうもないそんな知識こそが、人間が人間として生きていく上でとても意味のあるものなのではないかと思った。

郷土の歴史、また地名の由来を知ることにもやはり深い意味があるのではなからうか。たぶん生活を豊かにしてくれる何かがある。

本書は室蘭、幌別の主に海岸部の地名についての手引き書である。これを片手に散策すれば、知里真志保、山田秀三が歩いた後に従い、かつてアイヌがつけた地名の発生地を正確に訪ねることができるようになっていく。

アイヌ語地名は名づけられた場所の地理的な特徴を表すようにできている。しかし、およそ何がむずかしいと言って、地名の発生地、つまり名づけられた場所を探すことほどむずかしいことはない。たとえばニオモイ niomoy (86) といっても絵鞆 (えども) 半島には モイ moy 「入り江」がいくつもある。そのうちのどの入り江がニオモイであるか決定するのは山田秀三の立派な記述を丁寧に読んだとしてもなおたやすいことではない。ni-o-moy を「木のある入り江」と解釈するのは、アイヌ語を少しかじればわけもなくできる。だがそれが「岸辺に木のはえている入り江」などというのではなく、「流木の寄り上がる入り江」であることを知るためには、アイヌ語地名についてかなりの知識が必要となる。だがそもそもそういった知識は、方々のニオモイやニオモイに類似している地名のまさに発生地を実見することから得られる。しかし意味を知らなければ発生地はわからない。発生地がわからなければ意味が見えてこない。山田秀三はこの綱渡りのようにむずかしい研究をした人だ。

小坂博宣さんたちがしたことは、知里真志保、山田秀三の研究に従い、地名の発生地をもう一度、実際に探してみたということに尽きると思う。そして、それは室蘭と幌別の見事なアイヌ語地名写真帳としてまとめられた。

しかし、本書は先人の研究を超えるものをも含んでいる。本書には、久末進一さんのエッセーが二つ収録されているが、一つはイタンキ浜 (92) のイタンキの由来について、もう一つはムイ (57) の由来について述べたものである。どちらについても従来説かれてきたことは納得のいくものではなかった。それに対して、久末さんの述べていることは、間違いなく最も有力な説、否、定説になると思われる。古い文献の知識と地元の人間だけが持てる知見にしっかりと支えられた独創的な見解である。

また、知里、山田が知らなかった、明治初年のものと思われる「胆振国室蘭郡全図」(室蘭市立図書館蔵)が複写され紹介されている点も本書の価値を高めるところとなっている。

本書が、とりわけ地元室蘭、幌別の人々の地名探索のガイドブックとなることを願わずにはいられない。